第二節　古代・中世

上浦B遺跡　秋葉区川口

上浦B遺跡は、新津工業団地の造成に伴って、新津市教育委員会が平成四（一九九二）年に約七七〇〇平方メートルを発掘調査した平安時代の集落跡である。旧新津市域では、それ以前に行われた磐越自動車道造成等に伴う試掘調査により、沖積地にある古代の遺跡が非常に広範囲に広がることが明らかになってきていた。上浦B遺跡も工業団地の造成に先立つ試掘調査で発見された遺跡である。

図30　遺跡の位置
5万分1地形図「新津」

発掘調査では、地下約一メートルの地層から平安時代の遺構が検出された。遺跡の北側には旧河道があり、それに隣接する南側では、周囲を溝で囲まれた総柱建物跡一棟と、掘立柱建物跡二棟が方向を揃えて検出された。また、近くには井戸の跡や畑跡と推測される畝状小溝、ごみを廃棄したと考えられる土坑が多数見つかった。出土遺物から九世紀後半を主体とする短期間に営まれた遺跡で、河川交通による物資の集積を行った屋敷跡ではないかと推測されている。

母屋と考えられる掘立柱建物跡は、桁行五間（一二メートル）、梁間二間（六・四メートル）で、面積は七六・八平方メートル。束柱は検出されなかった。柱穴は直径一メートル前後の隅

丸方形または隅丸長方形で、直径三〇センチメートル程度の柱根（ちゅうこん）がよく残っていた。建物の周囲は、深さ六〇センチメートルほどの排水溝で囲まれており、排水溝からは多量の遺物が出土した。総柱建物跡は旧河道に近接する位置にあり、桁行三間（八・五メートル）、梁間三間（六・一メートル）で、面積は五〇・九平方メートルである。母屋に隣接する倉庫であろう。

旧河道や建物の周辺からは土師器（はじき）の椀（わん）や須恵器（すえき）の坏（つき）など、大量の食膳具が出土した。中には、「赤背山家」・「孝」・「物」・「二」などと書かれた墨書土器が八十数点あった。

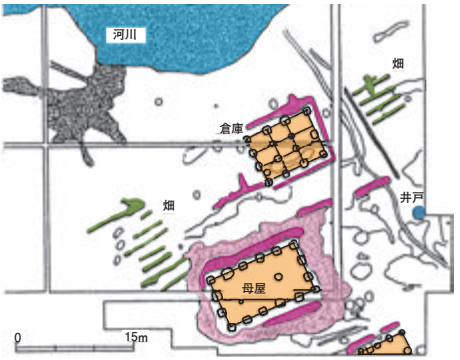

図31　遺構配置図　『黒埼町史』通史編掲載図から作成

須恵器は佐渡小泊（こどまり）産と新津丘陵産が主で、笹神丘陵産が若干あった。土師器はすべて新津産と推測された。また、希少なものとして奈良三彩の小壺（こつぼ）が一点出土した。他の遺物よりも古い時期であることから、貴重な品物として伝世したものと考えられる。ほかには袋状鉄斧（てっぷ）や鍬（くわ）先などの鉄製品や砥石（といし）、鍛冶（かじ）関連の遺物が出土した。

図32　復元された奈良三彩小壺　高さ4.9センチメートル